

終末期患者を持つ家族のニーズと援助

大滝 典子 (玄々堂君津病院)

1. はじめに

看護婦が家族内部に発生している問題を、早期に認識できなかったり、認識していても、家族がどのように対処してよいか悩んでいたりと、ニーズをニーズとして看護婦も家族も感じないまま、終末期を迎えてしまうことがある。今回家族のニーズを満たしながら、終末期患者を看取った家族への援助から、看護婦の行った援助内容を明らかにしたい。

2. 事例紹介

① 患者 M氏 63歳 男性 52歳で胃ガンの為、胃を3分の2切除したものの、60歳の時に残胃に胃ガンが発生。EMR (胃粘膜切除) による治療を続けていたが、H7. 5. 13に腹水貯留、食欲不振の為入院となる。入院後下血が頻回に見られ、輸血、IVHなど対症療法を受け、一時退院を希望するほど症状が軽減した。しかしその直後痛みが増強し、H7. 6. 5から塩モヒによる疼痛コントロールが開始され、その3日後H. 7. 6. 8家族が見守るなか永眠された。なお、58歳の時に、慢性腎不全が悪化し、透析療法が開始となり、以来週3回当院にて透析を受けていた。

M氏は、若い頃から輸送船の乗り組み員で、入院前は船長を努めていた。何事につけても自分ですべて決定したい性分で、妻によれば頑固で言い出したら聞かない性格であったとのこと。家族には胃ガンであることを説明されていたが、M氏には出血性の胃潰瘍と説明されていた。

② 家族の状況 患者と妻 (55歳)、長男夫婦と孫 (3歳) 患者の母親 (86歳) の6人家族。長男夫婦が中心となって花の栽培をしている。

3. 援助経過

	患者の言動	家族の言動	看護婦の言動
5月18	「食べれないことは俺はもうすぐ死ぬんだ」 緑黄色の下痢頻回		「IVHで栄養補給しているから大丈夫ですよ」と説明するが、患者は「食べれなくなったらおしまいだ」と繰り返す。看護婦は、「食べること」がM氏にとってどれだけ重要な意味を持つことであるかを知る。
20	タール便	透析の看護婦から、妻が不安を抱いているようなので相談にのってほしいと連絡あり。妻は「食べれないし便の色が変だし、昔の人はそうなるかと死が近いと言うじゃないですか」と不安を語る。	妻の不安な気持ちに気づかなかった事を詫び、現在の病状と今後予測される経過を説明した。妻の「本人がしたいようにさせてやりたい」という気持ちを支持し、家族が望む見取りが実現できるように一緒に努力することを約束した。
22	下痢が頻回、大部屋に便臭が充満し、転室の必要性が生じたが、本人は個室への転室を望まず。		妻に相談したところ、妻は最期の時を周囲の目を気にすることなく夫と過ごしたいという気持ちを語り、妻が夫に「朝日の当たる部屋の方が身体にいいから」と転室を持ちかけ、患者がこれに応じた。
23	頻回の下痢に「困ったなあ、こんなに便が出て、冷たいものを食べたからかな」と言いつつも、看護婦がオムツ交換をすることを拒否。		「食べる」ことがM氏にとっては生の証しでもあると判断し、「胃からの出血で、腸が刺激され便が出るのですから、好きなものを食べて大丈夫ですよ」と伝える。またオムツが汚れたままではだれてし

	患者の言動	家族の言動	看護婦の言動
5月 26	食欲が出てきてお寿司を食べる。	「昨日お寿司を持ってきたら食べてくれて、今日もイクラやウニを食べてくれた。少しでも食べてくれると面会に来る甲斐がある」と妻。孫も来院し、患者も嬉しそう。	まうと説明し、遠慮しないよう話す。上記のことを、病棟看護婦間で統一しM氏に関わる。 妻の患者に好物を食べさせたいという気持ちに共感し、患者の好物を調達する妻の努力を支持した。「最期まで生きる意欲を失わせたくない」という妻も気持ちを確認し、妻の希望にそって援助する旨を表現した。
5月 27	冗談などを言い、調子がいい。	M氏の調子が良いことで、妻の表情も明るく、今夜は出来たら病室に泊まっていたと話される。	残された時間を大切にしたいという妻の気持ちを尊重し、病室で過ごしていただく。
	妻の介助で入浴。「気持ちいいなあ、以前はトロン温泉によく行った」などと妻との会話がはずむ。	妻は、入浴介助ができることを喜び、夫との会話ははずむ。	M氏の臀部の清潔保持と気分転換のために、入浴を計画。妻に介助してもらうことを提案する。
6月 1	「こいつは、実は5人目の相手なんですよ」と妻とのなれそめを語る。	妻も夫に相槌をうち、嬉しそうな恥ずかしそうな表情。	「お二人は本当に仲がいいんですね」と意識的に話題を向ける。
3	発熱37.8℃ 一人で食事が摂取できず妻が介助。	夫は自分で、「6月か7月までしかもたないだろうと口にするんですが……」とにかく、苦しまないように見送ってやりたいと話される。	看護婦も後は苦痛のないように全力でお世話しますと伝える。
4	「家に帰りたい」と妻に語る。	「患者が家に帰りたい」と言っていると、妻が看護婦に相談する。	妻や息子、兄とも面接。それぞれの意志を確認したところ、「本人の望むようにしてやりたい」という気持ちであった。具体的に2日間の外泊計画をたて、その間の介護、緊急時の対応、搬送手段について具体的な対策を家族と共にたてる。
	(夕方より)冷汗、嘔吐が出現。痛みも増強をする。		
5	塩モヒ使用開始	主治医が病状を家族に説明し、延命処置について家族の意志を確認。「自然な方法で」積極的な延命を望まず。	
7	深大性呼吸毎分5回程度	妻は「呼吸がおかしいから、息子と呼んだ方がいいかしら」と看護婦に相談。	妻の冷静な判断を支持。患者の状態が、いよいよ最期の段階を迎えつつあること、家族の最期の別れを心ゆくまで過ごして欲しいと伝え、常に看護婦が側にいるからと援助を保証する。
8	家族の見守るなか、永眠される。	「最期まで本人のしたいようにさせてやられてよかった」と話される。	

4. まとめ

妻は患者が今までと違う状態を示し、どのように対処してよいか不安があったが、病棟看護婦が家族と話ができ、一緒に看取りをすることを伝えると、妻の方からニーズを表出しながら、患者を看取ることができた。家族は患者の生きる意欲を支えながら、最期の迫った患者を、冷静に判断し対処をしている。家族がどのように看

取りたいかを、看護婦が投げかけることによって、看取り方を自己決定していくようだ。看護婦は家族の決定を尊重し、必要時援助し見守っていくことが、必要であると思われる。1ヶ月後の遺族訪問で、家族から「看護婦に精神的に深く支えてもらい、やれることはすべてやってあげたことが嬉しい」という評価が聞かれた。

(1) 家族が表出したニーズ

- ① 患者の病状や死期を知りたい。
- ② 看護婦に自分の不安を相談したい。
- ③ 残された日々を夫と過ごしたい。
- ④ 患者の不安や苦痛を軽減したい。
- ⑤ 生の意欲を失わせたくない。
- ⑥ 二人の生活史を共有することで家族の絆を強めたい。
- ⑦ 介護したい。
- ⑧ 看取りの意思決定の保証をされたい。
- ⑨ 不安な気持ちや思いを表出したい。

(2) 看護婦がした援助

- ① 妻がどのような看取りをしたいか、確認し妻の気持ちを支持した。
- ② 今後予測される経過を説明し看取りの準備をさせた。
- ③ 夫と過ごしたいという妻の気持ちを尊重し、看取りの環境を整えた。
- ④ 患者の「食べられる＝生きる証し」という思いを、家族と共に支えた。
- ⑤ 夫婦が思い出を語る場面を意識的に作り、二人の絆を強くした。
- ⑥ 看護婦と一緒に妻がケアすることで、二人に満足感を与えた。
- ⑦ 家族の看取りの意思決定を支持保証した。
- ⑧ 外泊したいという患者の気持ちを大事に考え、家族と共に具体策を立てた。
- ⑨ 家族が心ゆくまで最期が過ごせるように、援助を保証した。

5. おわりに

終末期患者を持つ家族は常に不安や戸惑いを感じ、看護婦にいろいろな Sign を送っているが、見過ごしているのではないだろうか。患者、家族のニーズを支え、看取りができるように援助していきたい。